Program Notes

曲目解説

寺西基之（音楽評論家）

オッフェンバック　オペレッタ『天国と地獄』序曲

ジャック・オッフェンバック（1819−80）はフランスの作曲家で、オペレッタ（喜歌劇）の発展に大きな役割を果たした。彼の数々のオペレッタは社会風刺と政治批判を込めたもので、当時のパリで大変な人気となった。今日でも特に上演機会の多いのが『天国と地獄』（正式の題は『地獄のオルフェ』）で、ギリシャ神話のオルフェウスの物語を題材としたもの。この物語に基づく有名なオペラのひとつに18世紀のオペラ作曲家クリストフ・ヴィリバルト・グルックの『オルフェオとエウリディーチェ（オルフェとウリディス）』があり、19世紀半ばのパリではこのオペラがリバイバルされていた。そうした中でオッフェンバックはこの題材を面白おかしくパロディ化してオペレッタを作り上げたのである。1858年10月21日にパリで行われた初演は大成功を収めている。

本日演奏されるのはこのオペレッタの序曲として知られる曲だが、実はこれはオッフェンバックのオリジナルではなく、1860年のウィーン初演の際にオーストリアの作曲家カール・ビンダー（1816−60）がこのオペレッタ中の様々な楽想を巧みに繋げて編み上げたものである。

曲はまず神々たちの“反乱の合唱”による華やかな音楽で始まり、“ブリュトン（冥界の神）の登場”、“神々のクプレ”などの楽想が続き、さらにオーボエが“アリステのアリア”の導入（本来の前奏曲にも現れる）の旋律、チェロ独奏が甘美な“ウリディスのアリア”の旋律を奏でる。そして“地獄の合唱”の激しい楽想を挟んで、独奏ヴァイオリンがワルツのリズム上で伸びやかな旋律を歌う。これは嫌がる妻ウリディスにオルフェが自作のヴァイオリン協奏曲を無理やり聴かせる場面の音楽である（原作と異なりオペレッタでの夫婦仲は険悪である）。締めくくりはフレンチカンカン（カンカンはスカートをまくり、足を上げて踊る舞踏で、19世紀のフランスで大流行した）による躍動感溢れる“地獄のギャロップ”。日本では運動会やテレビのCMに用いられておなじみのギャロップである。

マスネ　オペラ『タイス』より「瞑想曲」

ジュール・マスネ（1842−1912）は19世紀後期フランスを代表するオペラ作曲家で、一世代前のシャルル・グノーが確立したフランス・ロマン派オペラの伝統を引き継ぎ、デリケートな感覚美と叙情的なロマン性を特色とするオペラを追求した。彼のオペラの代表作が1894年パリ・オペラ座で初演された『タイス』で、アナトール・フランスの小説「タイス」を題材とした作品（台本はルイ・ガレ）である。物語は4世紀のアレクサンドリアを舞台に娼婦タイスを巡って展開する。若い修道士アタナエルはタイスに信仰への道を説く。タイスはそれを受け入れ修道生活に入ろうとするが、そのタイスをアタナエルは愛するようになってしまう。尼僧院で罪を償い死の間際にあるタイスにアタナエルは愛を打ち明けるが、タイスは天国を夢見つつ息を引き取る。

本日取り上げられる「瞑想曲」は第2幕第1場と第2場の間の間奏曲にあたる。タイスが娼婦の道を捨てて信仰の道に入るという物語の転換点で奏される曲で、ヴァイオリン独奏がセンチメンタルな甘さの中にどこかはかなさを感じさせる美しい旋律を歌い紡いでいく。ヴァイオリン曲として単独で演奏される機会も多い名品である。

サン=サーンス　序奏とロンド・カプリチオーソ イ短調 Op.28

カミーユ・サン=サーンス（1835−1921）はフランス音楽の展開に多大な役割を果たした作曲家である。彼はオペラやバレエがもてはやされていた19世紀のフランス音楽界にあって、器楽の振興に特に力を注いだ作曲家であった。そのことは1871年に器楽運動の推進のためにロマン=ビシューヌとともに国民音楽協会を設立したことにも現れていよう。もちろん彼自身器楽曲の作曲を積極的に手掛け、「序奏とロンド・カプリチオーソ」も比較的初期の1863年に書かれた名作のひとつである。

この作品は、当時まだ若かったスペインのヴァイオリニストのパブロ・デ・サラサーテのために作曲された。サン=サーンスはサラサーテの名技に創作意欲を刺激され、すでにこの作品の前にもヴァイオリン協奏曲第1番を彼のために書き、また後年にはヴァイオリン協奏曲第3番を彼に献呈している。「序奏とロンド・カプリチオーソ」は協奏曲とは違って単一楽章の作品ながらも、管弦楽伴奏による協奏的作風のうちに豊かなカンタービレと劇的な表現をヴァイオリンの名技性に結び付け、そこにさらに粋なエスプリを感じさせるといった、サン=サーンスの音楽的美質を端的に示す作品となっている。

曲はイ短調、まず序奏（アンダンテ・マリンコーニコ）が置かれる。訴えかけるような印象的な語り口を持ったメランコリックな序奏で、やがてアニマートとなって動きを増し、主部へと入っていく。その主部（アレグロ・マ・ノン・トロッポ）はリズミックな主題を中心に、題のとおりカプリチオーソ［=気まぐれに］というに相応しい変化に満ちた展開を繰り広げるロンドである。最後は長調の華麗なコーダで閉じられる。

ワーグナー　オペラ『タンホイザー』序曲とバッカナール

ドイツの大作曲家リヒャルト・ワーグナー（1813−83）は音楽、文学、演劇などを一体化させた新しい総合芸術としての劇音楽（楽劇）を創造してオペラ史に革命をもたらしたことで知られるが、『タンホイザー』（作曲は1843−45年）はまだ彼が楽劇の様式を完全に確立する前の作品で、そのことはいまだオペラ（歌劇）と銘打たれていることに窺えよう。しかしながら従来の番号形式（オペラ中の各曲に番号を付したもの）を止めて音楽をより流動的に移行するようにしている点、指導動機の用法が鮮明になってきている点、管弦楽の役割が大きなものになってきている点など、のちの楽劇への方向がはっきりと現れている。

物語は、ミンネゼンガー（吟遊詩人）の騎士タンホイザーがエリーザベトという愛する人がありながら女神ヴェーヌスに心奪われ、官能を讃える歌を歌合戦で歌って追放されるが、最後はエリーザベトの自己犠牲的な愛のおかげで罪を許される、というもの。純粋な愛の心を持ち続けるエリーザベトや敬虔な巡礼たちに代表される清純で聖的な世界と、ヴェーヌスに象徴される官能的な世界との対比が物語の軸となっており、音楽も2つの世界の違いを性格的に描き分けている。

ワーグナーはこのオペラの序曲として、オペラ中の巡礼の合唱の主題を用いて聖的な世界を象徴させた主部と、歓楽の動機やヴェーヌス賛歌やヴェーヌスの動機によって官能的な快楽の世界を描いた中間部を持つ3部形式の曲を書き、1845年ドレスデンでの初演ではその序曲が用いられた。その後1861年にパリでこのオペラを上演するにあたり、第1幕の幕開けのヴェヌスベルク（ヴェーヌスの住む丘）の場面として激しい乱舞で肉欲を表し出す長大なバレエ音楽すなわちバッカナール（ヴェヌスベルクの音楽）を追加し、それに伴って序曲も手直しして、もとの聖的な主部の再現部分を省いて快楽の中間部から直接その第1幕のバッカナールに続ける形に改訂した。つまり序曲でのヴェーヌスの世界から第1幕のヴェヌスベルクの場面に流動的に繋がることとなったわけだが、元の版から十数年後の作ということで、作風としてはこの部分だけことさら斬新な響きが際立つものとなった。本日はこの改訂版の形で演奏される。

ガーシュウィン　パリのアメリカ人

アメリカの作曲家ジョージ・ガーシュウィン（1898−1937）は大衆歌の作曲家として出発したが、やがてジャズや大衆歌などのアメリカの民衆的な音楽語法をヨーロッパのクラシック音楽の様式と結び付けた新たな芸術音楽を創造することを目指すようになる。その最初の成功作が1924年に書かれた「ラプソディー・イン・ブルー」で、翌1925年の「ヘ調の協奏曲」がこれに続く。ヨーロッパの伝統的なピアノ協奏曲のスタイルにアメリカ的要素を溶け合わせたこれら2曲によって、彼はアメリカ・クラシック界の作曲家として注目を浴びることとなる。

この2曲に続いて書かれた管弦楽作品が「パリのアメリカ人」で、1928年に作曲された。彼は1926年のロンドン訪問の際に1週間ほどパリにも滞在、この街に魅了されて、心に浮かんだ幾つかの旋律を書き留めた。その後1928年1月にニューヨークの自宅から見えるハドソン川に霊感を得ながら構想を膨らませていく。そして3月に再びパリを訪れ、ここで様々な作曲家と交流する傍ら、この作品の作曲に取り組み、帰国後の8月1日にスケッチを仕上げて、11月28日に“管弦楽のための交響詩”としてスコアを完成させたのである。パリの情景を生き生きと描きつつ、そこにアメリカ人としての郷愁の思いを織り込んだ作品で、フランス風の洒脱な楽想やアメリカらしい物憂いブルースの楽想などを織り込みながら、3管編成（サクソフォンを含む）の管弦楽を巧妙に生かした華やかな作品となっている。初演は12月13日カーネギー・ホールでウォルター・ダムロッシュ指揮ニューヨーク・フィルによって行われ、大成功を収めている。

曲はシャンゼリゼ通りを歩く“散歩の主題”に始まる。車のクラクションの響きも取り入れ、また途中には20世紀初頭のパリの流行歌もトロンボーンが引用するなど、幾つかの主題を通して賑やかなパリの街の光景が描出されていく。突然動きが止み、ノスタルジックな気分に浸るが、また活気が戻ってきて、新しい主題で高潮する。やがて独奏ヴァイオリンやチェレスタが静かで神秘的な雰囲気を作り出すと、トランペットが感傷的なブルースを歌い始め、ホームシックがこみあげてくるように感情の高まりをみせた後、一転して陽気なアメリカ気質を取り戻すかのようにトランペットが快活なチャールストンの旋律を吹く。再びブルースが高らかに現れた後、曲頭の“散歩の主題”とともにパリの情景が回帰、最後はブルース旋律も重ね合されて閉じられる。